

2012年 春号

葬儀社員の葛藤

子供には、迷惑をかけたくないと、

生前から死後の備えにご相談になることがあります。

特に、お一人でお住まいの方はお葬式の内容を

お決めになり、

「じゃあ、大体この位の金額を残しておけばいいのね」

と、安心してお帰りになります。

ご自分でお決めになる葬儀の内容は、家族だけで

見送って欲しいという方が大半です。

一方で、お子様たちのお気持ちはどうでしょう。

ずっと、仲良くされてきた御近所の方々、ご友人は

どのように思われるでしょう。

立派な式を重視する意識は薄れつつありますが、

葬儀は縁ある人たちが集まり、故人を偲ぶ場です。

どのような形で送らせていただいたらよいか、

「その人らしい」

ご葬儀の提案を一緒に考えていきたいと思えます。



宗教者を招かない形の葬儀が増えていきます。

葬儀の打ち合わせで「お坊さんは呼ばなければならぬの
でしょうか？」と聞かれて、喪主様の真意を測りかねる時
があります。

「どうしてそうお考えになるのですか？」あまりに直接的
な聞き方になってしまうのですが、率直にお聞きするしか
喪主様の本意を察する方法がないのです。

「実は、お布施の額が気になって…」お経はいただきた
いのだけれども、お布施の工面がむずかしい。 本当は立
派に送ってあげたいのだけれど、今はこれが精いっぱい。」

送る人々に、葬送の気持ちがあることを感じることができ
ると、正直ホッとします。

「なるほどわかりました。 お葬儀当日だけでもお経をい
ただけないかお寺様にお願ひしてみましよう。」

一握りの心無い方達のせいで、色々誤解されがちな宗教
界であるのですが、葬家のご事情をお聞きになって、快く
引き受けてくださる方のほうがはるかに多いのです。

一方で、「宗教を信じていないから」とか「お布施が高い」
と返答に窮する答えをいただくこともあります。

あえて言わせていただくと、宗教を信じていないという方
が、どうしてお坊さんと呼ばなければならぬかを気にする
のかがよくわかりませんし、いったいいくらなら妥当な金
額だといえるのか逆にお聞きしたくなってしまいます。

お布施がお経の値段だとしたら、値段によってお経に差が
ついてしまうことになりかねません。 それともお経にも
松・竹・梅が存在していた方が選びやすいのでしょうか？

「お金がないから梅でしか送れなかった…無念。」と一生
後悔しそうで怖くなります。

大阪名物 造幣局桜の通り抜け
今年は4月17日(火)～23日(月)



造幣局本局は、藤堂家大阪屋敷のあ
った場所に造られ、そこで植栽され
ていた桜は、そのまま引き継がれ
ていた。明治16年に当時局長遠藤謹助
が「役人だけが花見をしてはいけない
」と、一般に公開することになっ
たのが始まり

「自分でお経をあげて、送ってあげようと思います。戒名
も考えてあります。」

以前に担当させていただいたお式の打ち合わせの場で、ある
喪主様はそうおっしゃいました。打ち合わせを始めて開口一
番のお言葉でしたので、若干、動揺しながらの打ち合わせと
なりました。お話を伺うにつれ、喪主様が現状の宗教界を否
定しているわけでもなく、ただ純粋にご自身の手で大切な方
を送り出したいというお気持ちが伝わってきました。

難しい判断でした。 葬儀社に務めているのですから、
様々な宗教儀礼の作法とその意義についても当然勉強して
います。

ご自分でお経をあげて送り出したいということは、宗教的
な儀礼の意義を十分に理解した上での考えです。 ですか
ら、なおのこと、宗教者による正しい作法での葬送儀礼をお
こなうべきではないのか…。一度きりしか行えない葬儀式に
おいて、後々「やっぱりお坊さんと呼ばよかったです。」と後
悔してしまうことは決してあってはなりません。 その時は
正直に私見を述べさせていただきます。

「お坊さんをお招きしないで葬儀作法を進めることは、ご参
列の皆様が故人様が成仏できないのではないかとといった不
安をあたえる可能性があります。ご参列の皆様の中に、宗教
者がない葬儀式に得体のしれない違和感を持たれる方が
いらつしやるとすれば、大切な方を失うという悲しい出来事
の中にあつて、つらい思い出を上塗りすることになってしま
います。ただ、あの世を信じている方がどれくらいいらつし
やるのかはわかりませんが、宗教作法によって本当に故人様
が成仏できたのかどうかは確かめようがありません。

「亡くなった大切な人に自分たちは何をあげられる
のだろうか？」

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

「亡くなった大切な人に自分たちは何をあげられる
のだろうか？」

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。

そんなお気持ちを大切にできるお葬式となるように、
これからお手伝いしていきたいと思えます。



哀悼と黙禱

去る平成 24 年 3 月 11 日午後 2 時 30 分、国立劇場にて「東日本大震災一周年追悼式」が執り行われ、式典会場では地震の起こった午後 2 時 46 分の時報に合わせ、犠牲者への黙禱が捧げられました。おそらく式典に参加していなかった方も、多くはこの瞬間に黙禱をされていたかと思えます。この死者を悼む気持ちを表す「黙禱」ですが、葬儀の場ではあまり見ることがありません。では「黙禱」とはどういう場面で使われるのでしょうか。

日本で黙禱が普及した時期については、大正 12 年 9 月 1 日発生の関東大震災の一年後、慰霊祭で行われた黙禱が最初という説が有力とされます。以後、事件・事故・災害などの発生時刻に合わせて黙禱を捧げる習慣が根付きました。良く知られるところでの広島・長崎の原爆投下の日と終戦記念日の式典では、秒単位で時刻を合わせて黙禱を行います。

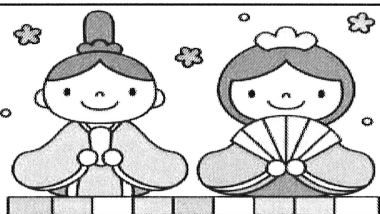
このような不特定多数の死者に対して、個人の信仰を超えて全員が一つの祈念行為として行うのに「黙禱」が採択された事には、やはり何らかの意味があるかと思えます。

「黙禱」の作法はまず起立し、やや頭を垂れ、目を瞑り、30 秒から 1 分間の間司会者から終わりの合図があるまで動きません。私はこの中でも「目を瞑る」という点が重要ではないかと思えます。目を瞑るという行為は外界を遮断し、自身の内面と向き合うからです。自身の内面にいる故人を悼み、またその死から自身の生を振り返るといふ思念に集中するのに、黙禱という行為は最適だったのではないかと考えられます。

葬儀では目の前にいる故人を悼みます。だから目を瞑ることはあまりありません。むしろその顔を忘れないよう、遺族は祭壇の遺影を見つめたり、お別れの際には顔に触れたりします。ですが、死から時間を経た追悼式などでは亡き人の姿はありません。だから人は目を瞑り、黙禱をする事で故人への哀悼を表すように思われるのです。

最後になりましたがこの震災で犠牲になられた方々へ追悼の意を表するとともに、心からのご冥福をお祈りいたします。

イベント情報



来る 5 月 20 日 (土) 午前 9 時より

花みずき会館にて**人形供養**を執り行います。

大切にしてきたお人形の「魂」を抜き「物」に戻す供養を行います。

これまで家族を癒してくれた、お人形やぬいぐるみをねぎらい、供養することで、人や物、自分があることを、今一度思い出して、感謝の気持ちを込め、お別れしませんか。

供養会場：花みずき会館

受付時間：9 時より (雨天決行)

供養開始：12 時より読経開始

供養対象：日本人形・ぬいぐるみ・西洋人形 等
※ガラス・アクリルケース・飾り台などはお預かりできませんあらかじめケースから出してご持参下さい

参加費用：一体につき 100 円



花まつり お釈迦様の誕生を祝う

4 月 8 日には、色々なお寺で「花まつり」が行われます。本来は、灌仏会(かんぶつえ)や仏生会(ぶつじょうえ)といい、悟りをひらいた成道会(12 月 8 日)・入滅の涅槃会(2 月 15 日)とならんで三大法会といつて重視されます。「花まつり」と呼ぶようになったのは明治以降のことのようです。

『四月の八日、七月の十五日に設齋(おがみ)す』という記述が、日本書紀の推古天皇十四年(AD 606)の条に書かれているのが日本における灌仏会の最初の記録だそうです。七月十五日というのは盂蘭盆会(うらぼんえ)のことです。

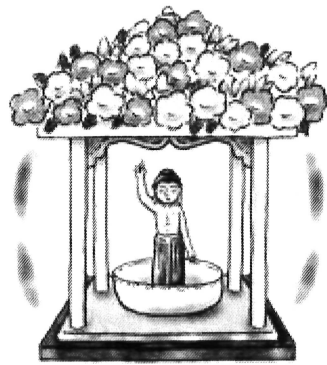
灌仏会は、盂蘭盆会と並んで日本における最古の仏教行事といってもよさそうです。灌仏会そのものは、中国で生まれた行事だと考えられます。

花まつりでは、お花で飾られたお堂(花御堂)のなかに甘茶を入れたお盆(浴盆)を置き、そこに、右手で上を、左手で下を指し示したお釈迦さまのお誕生の姿をあらわしたお像(誕生仏)を安置し、柄杓で甘茶を頭上からそそぎます。

花御堂は、お釈迦さま誕生の地ルンビニ園を、誕生仏は、お生まれになってすぐ七歩あゆまれて「天上天下唯我独尊」と言われたそのお姿をあらわします。

そして、お釈迦さまの誕生を慶び、天に龍が現れて、甘露の雨を降り注いだ、という様子を模して甘茶をかけるのです。

ちなみに、経典では「甘露の雨」は香湯あるいは香水となっており、昔は五香水とか五色水という香水を用いていたようです。



今のような甘茶を使うようになったのは、江戸時代からと言われますがはっきりしません。

法要のあとで、甘茶をふるまってくれるお寺もあります。皆様の中にも、お寺で甘茶を頂いた経験がおりの方もいらっしゃるのではないでしょうか。これを飲むと無病息災でいられるとか、これで墨をすり「千早振る卯月八日は吉日よ 神下げ虫を成敗ぞする」という言葉を書いて戸に張ると、長虫(ムカデや蛇)よけになるといふ言い伝えがあります。

現在使われている甘茶は、アジサイ科のヤマアジサイの変種、「小甘茶(こあまちゃ)」から作ります。長野県、富山県、岩手県などで契約栽培されています。9 月ころに葉をとり、水で洗い日干しをした後、水を噴霧してからむしろをかけて発酵させます。むしろに広げ、よく揉んでから乾燥すれば甘茶のできあがりです。こうして手を掛けて、そのままではやや苦いだけの葉っぱが、砂糖の数百倍もの甘味のある甘茶に変化するのです。その甘みから、花まつり以外にも、漢方薬の苦み消し、糖尿病患者の砂糖代わり、あるいは歯磨きの甘味、醤油の味付けなどに使われていて、漢方薬品店で購入することができます。



飲み方 ※販売元同封資料参照

茶葉 2g で コップ 1 杯分ほど。急須に入れても、コップに入れてそのまま飲んでも良い。やかんで煮出す時は、5g で 1L 分。煮出すほどに甘みがつよくなります。あまりに長時間煮出すと苦味成分タンニンもでるので、途中で味見をして下さい。

最後までお読み頂き、ありがとうございます。今後皆様役に立つ情報を提供するために、ご意見や感想をお待ちしております。

スタッフ一同